

昔むかし、ピペという名前の陽気な兵隊がいました。ピペは、年をとると、いくらかの給料をもらって兵隊をやめました。しばらく気楽に暮らしていましたが、やがてお金が無くなったので、旅に出ました。

旅のとちゅう、ずうっと前を、ふたりの男が歩いていくのを見えました。ピペは、「やあ、おふたりさん、どこへ行くんだね。待ってくれ、おれもいっしょに行くから」とさげびました。ひとりは白髪頭で、もうひとりはまだ若い男でした。ピペはふたりのそばまで行って、もっと大きな声で、

「やあ、たのむから待ってくれよ。おれもいっしょに行くから」とわめきました。すると、白髪頭がふり向いて、

「そんなに大きな声でわめきなさんな。わしは聖ペテロで、このかたはイエスさまだ」といいました。ピペは、ますます大声をはりあげました。

「たのむから、いっしょに行かせてくれよ。ちかかって何も悪いことはしないから」ペテロは、

「そんなにわめくな」といいましたが、イエスさまは、

「わめかしておきなさい」といいました。

こうして、三人は、いっしょに歩いて行きました。

やがて湖のほとりにやって来ました。ペテロとイエスさまは、向こう岸に渡ろうと思いましたが、船頭にはらうお金がなくて船に乗れませんでした。すると、ピペがさげびました。

「やあやあ、おれが三人分はらっておくよ。おれもいっしょに渡るから」

向こう岸について、三人は船から下りました。歩いて行くと、料理屋がありました。

ピペは、

「朝ごはんにしよう。おれがはらっておくよ」といいました。朝ごはんを食べてしまうと、ピペは、それですっかりお金を使い果たしました。ペテロは、

「すっからかんになってどうするつもりだ」といいました。ピペは、大声で、

「いや、なんとかなるさ」といって笑いました。

すると、イエスさまが、

「あなたには、渡し賃と朝ごはん代をはらってもらって、親切にもらったから、願いごことがあれば、なんでもいいなさい。その願いをかなえてあげよう。ただし、ひとつだけだよ」といいました。ペテロは、ピペが天国に行けるように願うといいのだがいいいました。けれども、ピペは、

「そんなことは願わないよ。天国には行けるにきまつてるもの」といいました。

「では、何を願うんだね」と、ペテロが聞くと、ピペは答えました。

「そうだな、おれは麦ぶくろをひとつ持ってるんだけど、何か欲しいものをいったらそいつがおれの麦ぶくろに飛びこむようにつて願うよ」

イエスさまは、

「その願いをかなえてあげよう」といいました。それから、三人は、握手をして別れました。

ピペは、一日半歩いて、ある町に着きました。お腹がぺこぺこでしたが、お金は一文もありません。そのとき、美しくかざった家が目に入りました。

「きつとお金持ちが住んでいるにちがいない」と思って、ピペは窓からのぞいて見ました。すると、その家では、結婚式が行われていて、食卓いっぱい、ハムや、焼き肉、ケーキ、ぶどう酒、そのほか、よだれのたれそうなものばかりがずらりとならんでいました。ピペは、つぶやきました。

「あくあ。おれの麦ぶくろが、あそこならんでいるものでいっばいになればいいな」そのとたん、ピペの麦ぶくろに、ごちそうが飛びこんで来ました。イエスさまのおっしゃったことをすっかり忘れていたピペは、大よろこびしました。

ピペは、麦ぶくろをかついで、町の外に出ると、牧場に腰を下ろして食べはじめました。すると、そこへ、ペテロとイエスさまが通りかかりました。ピペは、

「やあ、おふたりさん。こっちへ来ていっしょに食べないか」と大きな声でよびました。

三人は、楽しく食べ終わると、今度はほんとうに別れて行きました。

長い旅を続け、夜になってから、ピペはある町に入りました。泊まる場所を探していると、町の人が、一軒の家を教えてくださいました。

「恐くなければ、そこに泊まれるよ。夜になると、気味の悪いことが起こるんだ。でも、食べ物もあるし飲み物もたっぷりある。それにベッドもそろってるよ」

ピペはその家に入って行きました。そして、かまどに火をつけると、フライパンとべ

ーコンを探し出して、オムレツを作りはじめました。一生懸命ベーコンを焼いていると、いきなりえんとつから、人間の腕が一本落ちてきました。ピペはぎよつとしましたが、腹立ちまぎれにその腕をつかんで、台所の戸の後ろに投げつけました。それから、ベーコンを焼き続けました。

まもなく、腕がもう一本落ちてきました。

「ちくしよう、どうしたっていうんだ！」

ピペは、その腕をつかんで、乱暴に戸の後ろへ投げました。

ベーコンが焼けたので、ピペは、たまごを割ってフライパンに落としました。そのとき、足が一本落ちて来たかと思うと、どすんと、二本目の足も落ちてきました。

「ちくしよう、いくらなんでもひどすぎるぞ！」

ピペは、二本の足も、戸の後ろへ投げました。

たまごをかき回していると、こんどは、頭が落ちて来て、目玉がぐるぐる回りました。

「おい、おまけににらむのか！」

そういって、フライパンを下に置くなり、その頭をどんとつきました。頭は、戸の下まで転がって行きました。

「もうがまんがならん！」

そういって、フライパンをまた火の上にもどしたとき、胴体が灰の中にどしんと落ちて来て、灰が舞い上がってたまごの上にもどして来ました。

「ええい、ちくしよう！かんにん袋の緒が切れたぞ！」

ピペは、胴体に飛び乗って戸の後ろへ蹴りこみました。

「これでかたづいたろう」

ピペは、オムレツをテーブルにのせて、ぶどう酒のびんを二本探し出してくると、食べたり飲んだりしはじめました。

まもなく、戸をたたく音が聞こえました。ピペは、

「ほうっておこう」と思って、食べ続けました。すると、また、戸をたたく音がしました。ほうっておくと、また音がして、ドアが開き、大きな黒い男が入ってきました。ピペは、

「何の用だ」とさげびました。

「いま、教えてやる」

黒い男はそういって、つかみかかって来ました。ピペも男の体をつかんでもみ合いました。どうにも手におえそうにないと思ったとき、ピペは、麦ぶくろのことを思い出ししました。

「ああ、おまえを麦ぶくろに入れられたらな」と思ったとたん、男は、麦ぶくろに入っていました。ピペは、杖を取って、ふくろをひっぱたきはじめました。男は、ふくろの中で恐ろしい叫び声をあげました。

「おれを、たたき殺すことはできないぞ。おれは、緑色の水の入ったびんを、胸に下げてるんだ。このびんをたたきこわさないかぎり、おれは参りはしないんだ」

ピペはしかたなく、男をふくろから出して、つかみかかりました。そして、びんを見つけると、粉々にぐちゃぐちゃになりました。そのとたん、黒い男は、美しいお姫さまになりました。

お姫さまは、泣いてよろこびました。

「あなたのおかげで救われました。わたしは、もう六百年もここでまほうにかけられていたのです。どうぞ、わたしと結婚してください」

それから、お姫さまは、ピペを地下室に連れて行って、たくさん金、銀、宝石を見せました。そして、

「一生のあいだに必要なものをお取りなさい」といいました。

夜が明けると、町の人たちがやって来ました。

「かわいそうに、あの男も死んでしまったんだろうな」

そういって、家に入って行くと、ピペとお姫さまがすわっておしゃべりしていました。

町の人たちは大よろこびしました。

ピペは、お姫さまに、

「結婚するなら一年と一日待ってください。おれはもつと世間を旅してまわりたいんだ。もつと、もつと、遠くへ行きたい。一年が過ぎたらもどって来るから、結婚しよう」といいました。そして、麦ぶくろに金、銀、宝石をつめて、別れを告げました。

長い旅をして、ある町にやって来ました。その町では、いたるところに黒い旗がたられてありました。ピペは、料理屋に入って行って、

「どうして、この町では、何もかも黒い布でおおってあるんだい」とききました。料理屋の主人は、

「この町に貧しい男が住んでいましてね、子どもに食べさせるだけのものがなかったん

ですよ。それで、お金を手に入れる代わりに、ときが来たら悪魔に魂を売りわたす約束をしたんです。そして、書類に自分の血で署名してしまったんです。ちょうど、今日、そのときが来て、大魔王ルシフェルが男を連れに来ることになっているんですよ。それで、町の人々が悲しんで、黒い旗をたらしてるんです」といいました。

ピペは、その男の家に連れて行ってもらいました。男は、部屋の中で、まっさおになってがたがたふるえていました。ピペは、テーブルについて、食べたり飲んだりしながら、いいました。

「じいさん、恐がることはないよ。ルシフェルが来たら、やっつけてやるよ」

真夜中になると、とつぜん、えんとつから、家がぶっこわれるのではないかというほどのすさまじい音が聞こえました。それから、戸をたたく音がしました。

「入れ！」と、ピペがいうと、大魔王ルシフェルが入ってきました。

「何の用だ」と、ピペがさげふと、ルシフェルは、男に手をのばしました。ピペは、「おれの麦ぶくろに入れ！」と、大声でいいました。とたんに、ルシフェルは、ぶくろの中に入っていました。ピペは、杖を二本取って来て、ぶくろの上からぶったきはじめました。ルシフェルは、雄牛みたいにほえました。

「書類を出せ！」と、ピペがいうと、ルシフェルは、

「いやだ」とさげびました。ピペは、火花が散るほど、たたきました。ルシフェルは、「出してくれ！書類は渡すから！」と、大声でいいました。

「まず書類を出せ。そのあとでおまえを出してやる」

ピペが、ぶくろの口をちよつと開けると、ルシフェルが書類を出したので、男が、書類を取って燃やしてしまいました。

ピペは、大魔王ルシフェルをぶくろから出してやりました。たちまち、十万の悪魔がやって来て、家じゅう悪魔だらけになったかと思うと、いきなり、悪魔たちはえんとつから外へ飛び出して行きました。すさまじい音がしたので、町の人たちが、かけつけてみると、ピペと男が、楽しそうにお酒を飲んでいました。

こうして一年が過ぎました。ピペは、お姫さまのところに帰りました。結婚式があげられ、お祝いは八日間続きました。

やがて、ピペも年をとりました。ピペは、お姫さまに、自分が死んだら、棺おけに麦ぶくろを入れてほしいとたのみました。

ピペは、亡なくなると、天国に行って、とびらをたたきました。

「外にいるのはだれだ」と、ペテロがたずねました。

「ピペです」

「そんなやつ、ここには用はない。もっと先へ行きなさい」

そこで、ピペは、地獄じごくへ行って、とびらをたたきました。

「外にいるのはだれだ」と、大魔王ルシフェルがたずねました。

「ピペです」

「帰れ、帰れ！そんなやつは、入れてやるわけにはいかん」

そこで、ピペは、また天国行って、とびらをたたきました。

「外にいるのはだれだ」

「ピペです」

「また、きみか。もっと先へ行きなさい。きみは、イエスさまにいわれたとき、天国を願わなかったじゃないか」

「それでは、ちよつとでいいから中をのぞかせてください」

ペテロは、ちよつと、とびらを開けました。ピペは、そのすきまから、いそいで麦ぶくろを投げこみました。そして、

「ああ、おれの麦ぶくろに入りたいなあ」といったときには、もう、ふくろの中に入っていました。

こうして、ピペは、天国に入ることができました。ピペのほうが、ペテロより、りこうだったというわけです。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話14 ロートリンゲン』関楠生訳／ぎょうせい